

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第13回）「体力の向上」部会 要点録

開催日時	平成22年7月14日(水) 午後3時37分～午後6時07分	
会場	練馬区役所東庁舎4階 401会議室	
出席者	委員	米津光治、中村 隆、宮野いずみ、工藤智昭、難波民雄、田中泰明 (敬称略)
	その他	教育出版
	事務局	五十嵐浩子 統括指導主事

1 挨拶

事務局

本日の資料の確認をする。次第と、田中先生から「健康な生活」という横版のもの、それから「薬物乱用防止」が一つ、その横に工藤先生のマット運動のTTの事例案を置いた。それから前回の話し合いを渡邊がまとめたものを配布した。

2 協議

委員

TTのマット運動の指導事例案を書いた。大きな項目は活動のねらいと本事案だ。活動のねらいの中に体育科の6年のマット運動の目標と、本事例と体力向上との関係、Ⅱ期における技の指導のつながり、本事例の小中一貫教育における期待される効果を書いた。

まず(1)体育科6年のマット運動の目標を3点、指導要領から抜粋した。①は技能面。基本的な回転運動や倒立技を安定して行うことと発展技、それから繰り返したり組み合わせたりすること。②は態度面で、安全、約束を守って運動すること、それから器具の使い方。③の思考・判断は、自己の能力に適した課題解決の仕方、練習方法や、技の組み合わせを工夫すること。(2)本事例と体力向上との関係で、マット運動の特性を5点挙げた。日常では経験できない多様で複雑な姿勢を伴う運動感覚を体験できる楽しい運動であること。「達成型」の運動であること。美しいという美的要素を含む運動であること。できる、できないがはっきり分かってしまう運動であること。基礎的な力が段階的に身につかないと高度な技に取り組むことができないこと。その点を踏まえて第Ⅱ期のマット運動にはどのような関係があるかまとめた。そこで特徴的なのは、5、6年の発展技に、中1、2年が基本技として取り組まなければいけないことだ。

5、6年は発展技なのでやらない可能性が大きいですが、中1、2年生では基本技なので、5、6年生でやっていないとできない。これらを小学校時にしっかりと指導し、経験させておくことが体力の向上の視点において大変重要。補足で、本分科会の体力向上の視点の安全な転び方や破折事故を防ぐ身のこなしの習得にマット運動がつながることもある。

それも踏まえて(3)本事例の小中一貫教育における期待される効果。運動の特性にも触れたが、個人の能力差、目あての多様化、これは場の複数化につながる。それから基本技の習熟度、高難度の技などの要因により、小学校のマット運動の授業で担任1人が児童全員に発展技を指導し、経験させることは難しいのが現状で、ここで連携して指導にあたることで、小学校

での発展技を中学校の基本技につなげられる。期待される効果は、まず専門性の高い中学教員により、発展技を多くの児童に経験させられる。2番目に、Ⅱ期の3年間を見据えた学習過程を組むことができる。これがうまく連携すれば、3年間を見据えてその学校独自の学習過程を組むことで、マット運動や器械運動のよさが非常に出る。それから体育専科の教員の指導法のよさを小学校教員が学び、いかすことができる。中学校教員は、小学校児童の実態を把握し、中学校の指導にいかせる。今回は同一敷地内なので、授業時程が組みやすく、打ち合わせしやすい。ねらいで(3)をまとめた。小中一貫教育のよさは9年間を通して継続した指導を行うこと、1年生から計画的に指導を行っていくこと、小中の両教員が同じ職場にいること。

2番目は指導計画、大まかな学習過程と本事案で、学習過程を8時間書いた。最初に「知る・つかむ」段階、オリエンテーションで1時間取った。それから2～6時間が自分の力を高めたり、経験する段階。7～8時間目は発表会をしたりする、まとめの段階とする。本時は「高める」段階の4時間目で、小学校では倒立系の技に発展技が多く、その発展技が第Ⅱ期の中学校の基本技となっているので、この辺りに中学校の先生に入っていたらどうか。下は時間配分で、流れは準備運動系の「ウォーミングアップ」、習熟学習の「基本技を身につけよう」、それから挑戦学習の「発展技に挑戦しよう」だ。斜め線は、5・6・7・8にいくにしたがって、発展学習に時間を割くよう時間配分するという意味である。

それから最後のページは本時案、第4時を細かく書いた。あらかじめカードに目あてや取り組む技を書かせ、グループに分かれて取り組む。その時に中学校の先生は技を実演しながら、全体指導をする。そして子どもたちは各場を回りながらそれぞれ練習する。発展としては、倒立と倒立ブリッジとロンダートとした。これは小学校では非常に危険な技なので、補助のつけ方も指示して説明し、やらせる。小中の先生が連携をとりながら、子どもたちにグループでうまく補助させながら、安全に経験させていく。その後は整理運動と、学習カードを使いながらまとめるがどの程度の指導事例案にするのか。また、学習カードの例や指導資料をどうするか。

場の図、それから学習資料としていま挙げた取り組む技、補助倒立、頭倒立、ブリッジ、側方倒立回転、倒立、倒立ブリッジ、ロンダートの例示を全部出すので、それで1枚とられる。それから場の図と例示、それから学習カードの例が1枚いると思う。

委員

中学の先生が1時間だけスポットで入るイメージか。

委員

その学校の体制にもよるが、一番重要で危ないところでもある倒立系のところを考えた。入れるのであればほかの時間も入れたほうがいいが、最低でも1回したい。

委員

少なくとも2～3時間連続で入れたい。いきなりTTで45分は打ち合わせをしてもなかなかできない。

委員

これは指導事例案で、2時間目に入っても同じような指導事例案は作れる。結局知りたいの

は、どのようにうまくコンビネーションを組んでやっていくかだ。とりあえず中学校の先生が専門家であることが多いので、難しい技の示範をする。それから補助、そして子どもの練習の仕方の指導をするところで、うまく回る役割分担がいいと思う。

事務局

もし桜小中に特化するならば、5、6年生は50分授業になり、時間割がずれない。

委員

マット運動は小学校でやらずに中学校に行くところが見られるので、この辺りをTTで指導しておけば体力向上の部分で中学校もいい。そして小中一貫のよさを使えば、スムーズに、合理的に指導できるのではないか。本来ならばⅡ期におけるマット、器械運動などの3年間の学習過程が作れる、それが小中一貫のよさだ。ただ学習過程は学校独自に組むものなので、ここでそれをやるのは意味がない。本当は3年間を見通した指導が打ち出せて、もうちょっと例示できればよかった。もし2～3時間でできれば、小中一貫の授業としての体力向上の取り組みのよさを打ち出せるかと思いついてみた。

事務局

この表はとても意味がある。中は中からしか始めないし、小は小で終わる、その接続の部分でいかに何かできるか、大変大事だ。

委員

倒立技はⅠ期でも肩倒立とか、1年生のマット遊びなどで、それに類似したものを経験させることは必要だ。本当は、前転や後転も同じように指導されていない部分も多く、中学の先生は困っているが、やはりここがおろそかになっている。小学校の発展技はほとんどやらせられないのが現状だ。その辺りも踏まえて連携した指導ができると、それだけでかなり違う。

アドバイザー

この表はすごくいいと思うが、気になるのは、あえて中学校の先生に指導してもらおうスタンスだ。考え方として、中学校の教員がTTでかかわって小学校の児童すべてに発展技を学習させる必要はあるのかが気になる。あくまでも小学校の学習なので小学校の先生がメインになる。けれども基本的なところが十分ではない児童にかかわる中で、現実に発展技まで指導するのは難しい。そういう時に初めて中学校の教員の出番がある方がスムーズに行くのではないかな。

委員

器械運動の学習過程には単線型と複線型があり、これは当然、複線型で、中学校の教員が高度な技に挑戦する子どもにかかわる学習形態だ。複線型でやるという共通理解を得ないと。指導形態を最初に確認しておく必要がある。

委員

今回は基本技をやる部分と発展技に挑戦する部分の2段階だ。その発展技に挑戦する段階で、

全員がここに例示した技に取り組めるかは非常に難しい。ただ、知識としてこの技はこうやる
と知っていることは必要だ。とりあえず指導の中に、それに触れる部分を持ってくる。

この後は苦肉の策で「自分で発展技を選んでやる」という表現にしたのは、そこまで届かな
い子もいて自分のめあての繰り返しになる。実際の指導はそうなるだろう。その辺りをどの程
度この指導案に盛り込むか。要するに中学の先生が学習過程のどの段階の、どの場面でかかわ
るのが効果的か。逆に中学の先生としてはどこでかかわりたいか、中学の指導にどうかせる
かをお聞きしたい。

アドバイザー

そもそも中学校の器械運動がどのように行われるのか、どの辺りを目標にしているのかが具
体的にないと、小中の接続で何をどうするかはなかなか見えてこない。

委員

2の指導計画の時間配分の習熟学習は、小学校の担任がかかわっていいと思う。挑戦学習「発
展技に挑戦しよう」、ここが中学の教員の出番である。例えばそこをTTでやると、発展型の挑
戦は、やはり中学校の教員の力が結構大きい。ただそれをやるためには、かなり入念な打ち合
わせが必要だ。小学校の教員は、自分で場の設定を考え、できた、できないという学習カード
を作る。それを、中学校の教員がどの程度理解してくれるかという問題もある。

委員

例えば初年度は何時間か入ってもらってやり、2年目をやると、第Ⅱ期の学習過程をTTで
やる流れができる。小中一貫校の第Ⅱ期をTTでうまくやっていくことで、その学校独自のマ
ット運動や器械運動の3年間の学習過程が組めるよさもある。そこまで行き着けばかなりの小
中一貫のよさ、小中連携の指導体制のよさになる。

委員

やはり9年間を見通した計画を立てていくのはすごく大事だ。倒立技などの図はあまり私た
ちの目に触れないので、しっかり明示されているとすごくいい。TTに関しては実際にできる
かという部分もあるが、できると仮定すると、やはり発展技でやっていくと思う。中学校とし
てはここをといるところをいろいろ聞いたうえでやっていけると、もっといい。

委員

例えば5年で基本の学習をある程度充実させ、6年がこれ、そして中1になるともっと発展
的な話題と、3段階ぐらいで示してもいい。もう一つの案としては、例えばマット運動の学習
はいま8時間がオーソドックスな線だが、それを12時間とり、次は6時間という形もでき
る。実は桜小もそろそろ指導計画を作り始め、その辺をどうするか話し合っている。例えば5、
6、7年に重点的に時間をかけて学ばせ、この時間の勉強とはこういうものだよとやるのかど
うか。それから学習過程は5、6、7年生の形でもっていくのか、いろいろな考え方が出てき
て、この部会として何を提案するのか。

委員

先ほども話したが、とりあえずオーソドックスな提案をし、あとは学校独自のものを作ってもらわないか。

委員

そうするとやはりどこかで、こんなことも考えられるということ、この部会の結論としていくつか挙げておく必要がある。例えば学年によって時間をどう考えるかとか、単元によって学習過程をどう考えていくかは当該の学年や学校の考え方によるが、ここではこれを挙げたという形にしたほうがいい。

委員

今回の小中連携の TT は桜小では初めての試みなので、連携にはこんな形もあるのかということと、マット運動で連携する体力向上的な意義と期待される効果を挙げてみた。あとは場づくりの例や技の取り組みや指導資料、学習カードなども必要だと4ページぐらいになる。

委員

この案でいくと取り組む基本技があって、今日はこんなことに注意して取り組みたい、発展技の取り組む技があって、僕はこんなことに取り組みたいという形とあとは時間の配分だ。

委員

7、8になっていく段階で挑戦のほうが広がっている。挑戦学習であってもある程度技が難しければ、実態によって組み合わせだとか連続もありかと思う。

委員

学習過程はこれ以上詳しくならないか。

委員

かなり削って最低限。これを補うために、子どもに提示する指導資料と学習カードと場の例のようなものがあれば、なんとか授業でできるぐらいの用意になる。

アドバイザー

一つは、なぜ小学校の授業に中学校教員が参加して指導にかかわらなければいけないのか説得するものがないといけない。技の発展性は、説得力として出てくる。それから2ページ目の期待される効果もいい。二つ目は、具体的に中学校教員がどうかかわったらいいか。初めてやろうとした時に、例えばマット運動のこういう場面でこんなかかわり方ができるという程度。それで十分な気がする。学習カードなどはあったほうがいい。

アドバイザー

小学校の先生よりも中学校の教員が、小学校の授業を見たり、指導にかかわることでものごく刺激を受け、中学校の授業が変わる、そこが一番大きい。

委員

僕も例示しか見ていないので、これを全部というのは実態とかなり乖離する部分がある。ただこれをどのように埋めていくかという理念が大事だ。全員、発展技が全部でき、それが中学で基本技として成り立つかというとながしいが、やろうとする試みは必要だ。

アドバイザー

中学のマット運動は特に共習とか別習とは示されていないし、中学によっても違う。

委員

マットについてはどちらでも、共習でもグループを作ればいいわけで、問題ない。

アドバイザー

これは小学校の授業だから共習である。

事務局

であれば、中学校の先生は男女でくっついているので、T3 までいることになる。

委員

それは画期的だ。時間のやりくりができれば T3 まで可能だ。考えているのはそこに書いた側転系で、前もって選んでやる。実際に見ていて一番難しいのは補助倒立。ここも授業のねらいや学級の実態に応じてやるが、ひと通り全部経験させて習熟させる部分もあるし、選んでやっていく部分もある。あと技を例示して知識として覚えさせて、取り組んでいくやり方もある。今回はそこまで踏み込まず、それぞれの実践指導の中でやってくださいということ。

事務局

中学校の先生はそう思うかもしれない。回転技のところは一応例示と書いてあるが、この中から選択して例示してあるので、基本的に習熟させればいい。

畑先生にもお示しし、また男性の体育の先生にも見てもらう。

委員

資料は、オーソドックスにめあてが書ける学習カードは子どもに対する例で必要だ。あと技の例示、教科書に載っているような体の回転が順番にストップモーションの写真のようなものだ。これは学習カードの裏などに示し、折って資料を作る。これを見て理論だけ聞いても、どうやるのでは困るので、パッと授業できるものがあったらいいかもしれない。

事務局

では次に、健康な体づくりを目指した授業案について検討する。

委員

第Ⅰ期と第Ⅱ期のチェックカードについて、イメージとしては月に1週間、家庭と連携しな

がら特に睡眠、食事、排便の調査をし、高学年はそれをまとめてチャートにし、自分の生活習慣はどうなのだろうと見ていくもの。実際にこれと似たようなものを自分の学校でしたことがあり、それなりに効果はあった。ポイントが高ければ健康だというようにある程度指針があつていいと思った。一番大事なのは、振り返りをしてお家の人からコメントを頂くことだ。

アドバイザー

素朴に、この9時とか6時半とか10時という時間はどうか。

委員

養護の先生と相談して、このぐらいの睡眠時間が低学年には必要だろうと意見をいただき、こちらの時間にした。

アドバイザー

ここに学校として時間を入れる方法もあるが、ここを四角にして、お家の人と相談して時間を決めて、それが守れたかぐらいで逃げる方法もある。無用なクレームが来なくていい。

事務局

9時に寝て、6時半に起きて、朝ごはんを食べて、うんちが出た人は、1日に4ポイントとカウントする。

委員

難しくて意味が分からない。

事務局

20ポイントは1週間の目標ポイント。最高20ポイントだということ。田中先生としては、これは月1回が基本の提案で例えば季節の変わり目とか、アレンジはいくらでもできる。

委員

月1でも厳しい感じがする。

委員

チェックが横なのが気になった。1日1日の振り返りのほうが、やりがいがある感じがする。

アドバイザー

ポイントも横の合計よりも縦で、1日で何点だったかのほうがいい。

委員

これはI期とII期、どう関係があるのか。「けがの防止」が出ているが。

委員

話が変わってくるので、そのことにはいま触れていない。カードと指導案は全く関係ない。

私が第Ⅲ期で一番いいと思っているイメージは、お家の人とやり取りをするいい機会になるのではないかと考えている。

委員

Ⅲ期はすごく難しい気がする。

委員

空欄で話し合い、設定を自分で決めてそれができているかチェックする。

委員

空欄にしたら、例えばうちの6年生は、10時や10時半なんかには寝てられない。親と相談して「1時から7時です」と絶対ある。それでよしとできない部分もあり、判断が難しい。

アドバイザー

現実にそういう子どもの生活の実態があるとしたら、それに目をつぶって、理想の時間を書いてチェックしたからオーケーというわけにもいかない。つまり大事なのは10時に寝るとか、11時では駄目という話ではなく、この先も健康な生活を送るためにこういうところに気をつけて生活しなければ駄目なのだと気づかせることが重要だ。

委員

1年生からやるのだと、できたら○としたほうがやりやすい。ただⅠ期にも幅があるので、時間を書いたほうがいいのかもある。

委員

これはCD-ROMで編集できるから学校で担任が子どもの実態を見ながらアレンジする。

アドバイザー

それがどこかに書いてあればいいのではないか。このカードを使って時間を書かせることもできるし、あらかじめ時間を決めてできたかできないかで○とか△とか……。一番下に少し注意書きを書いて、それは消して印刷すればいい。

委員

この部会として考えなければいけないことは、例えばⅠ期、4年生までで、中1までで、どんな子を育てたいのか。4年、7年、9年でそれぞれどんなことを最低限、健康な生活のために重視しているという話が最初になれば、これは成り立たない。Ⅰ期はこれでいいと思うが、Ⅱ期、Ⅲ期はどうなのだろうと考えた時に、全部一律に同じカードで形だけ変えてやるということはない。それを考えなければ、何も進まない。Ⅱ期の寝る時間、起きた時間なんてナンセンスで、健康な生活のためにやるのが違うのではないか。Ⅲ期は全く意味をなさない。一貫

校を卒業していく9年生を、自分の健康な暮らしについてどのような考えを持ち、どういうことが実践できる子に育てるか、それをきちっとやらないとこれは出ない。

アドバイザー

そもそもなぜここで必要かという点、保健学習は3年から入るので1、2年がない。1年の学級活動でこんなことができるという提案があり、示していただいた。それと同じようなことが、保健の学習の中で学びながらこれを活用する可能性はあるが、中学校になればもうレベルが違う。もし作るとすれば、やはり受験期。生活習慣が乱れがちな受験期に、1年から8年まで学んできたことを実際に自分でどう実践していくのか、いけるのかを確かめる。

委員

例えば9年生は、単語は「食事」「睡眠」でもいい。自分の健康な生活のために意識して生活しているか。もう一つ避けて通れないのが、心の問題。多感でいろいろなストレスが加わってくるこの時期には、心の問題も絶対に健康な生活の中に入ってくる。9年生としては、自分でコントロールできるかという問題になる。その辺がすごく大事である。

アドバイザー

心の問題は問題を起した時にタイムリーに指導することもあるが、すべての子どもたちに指導するのであれば、年間で位置づけた場面で指導しなければいけない。それは年間の学級活動の計画に沿った形で提案してもらおうと、一番すんなりいくのではないかな。

事務局

6年生でも出てくるし、中2の保健で指導事項の中にも、ストレスといかに付き合うかが単元である。そして受験期に自分でどう実践していくか。この部分はやはりはずせない。

アドバイザー

かつて、長期の休業明けに教育相談週間のようなものを設けていた。ところが特に中学校は今すごく忙しいので、なかなかできない。ぜひ小中の中で、学校としてそういう時間を捻出しましょうと提案してほしい。

委員

これは資料なので、Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期と一通り流れて、小中一貫ではこういう取り組みをすることによって、どういうねらいがあるかというところがある程度ないといけない。

健康チェックをすることによって、自分の生活習慣にしっかり気づかせる指導を9年間定期的にすることの重要性や意義、また小中一貫での活用法、そういうのがあるといい。

委員

では指導案に。両方とも私が経験のあるもの。③のねらいは、特別活動の学級活動のねらいをまず入れ、その後に事例に基づくねらいを入れた。実際分かったのは学活の内容が1、2年でも5、6年でもあまり変わらないということ。Ⅰ期目の事例について。「健康な生活ーげん

きなうんちとなかよくなるう」を学級活動で作った。ねらいは、便に対して大切なものという意識を持ち、健康には排便が深くかかわっていることを知る。便の形状が健康状態を知る手がかりになることを理解する。1年生の1学期にやるのが一番いい。

本事例と体力向上（健康な体づくり）との関連。健康な体づくりに必要な要素は「運動・睡眠・食事・排便」の四つで、どの段階の児童においてもこの要素は不可欠だ。Ⅰ期における育てたい児童像は、基本的な生活習慣の形成である。毎日規則正しいリズムで生活し健康を維持することは、学校生活すべての土台となる。健康な生活への意識を高める活動を意図的・計画的に行っていくことで、基本的な生活習慣の獲得につながっていくものとする。本事例では生活習慣チェックカードでの活動を通し、朝の排便の大切さに視点を置いた。「うんち」は汚い、くさいといったイメージがあり、うんちが人間の体にとって大切であるということを楽しく伝えられる授業の工夫が必要である。本事例では、生活習慣チェックカードの活動を家庭と連携することで、効果的に扱うことができる。⑤本事例の小中一貫教育校に期待される効果。Ⅰ期からⅢ期まで継続的に生活習慣チェックをしていくことで、心身ともに健康で安全な生活態度の形成を行うことができる。また9年間の変容を見取ることで、具体的なアドバイスができる。そして家庭との連携をしていくことで、よりよい生活習慣の獲得につながっていくと考える。右側の本事例の概要は、単元のあらましが七つに分かれている。「けんこうたいそう」は、実際には「おしりかじり虫」でおしり振り振りした。導入部分、まず「うんち」について知っていることを普段の生活から洗い出し、「うんち」はすごいということ子どもに知らせる。エプロンのパネルシアターのような感じで食べ物の流れを説明をする。そして5番は、絵本の読み聞かせをしながら「うんぴ、うんにょ、うんち、うんご」のどれがいいのだろうと。そして普段の生活と大便について振り返る。うちは学校でうんちを我慢してしまう子が多いので、決して恥ずかしくないという締めで学習が終わる。

アドバイザー

その時に使った教材のようなものが一部でもあると、イメージできるのではないかな。

事務局

「うんぴ、うんにょ」は、ほるぷ出版に許諾をとらないと駄目か？

アドバイザー

健康な生活を送るためにはやはり知的な理解が大事だ。それを1年の段階から意図的にきちんと指導する、それが小中一貫校に期待される一番大きな効果だと思う。

今回の指導要領の改訂にあたって「知的基盤社会」のような用語が使われているが、まさに知的なものに学校としてちゃんと対応していることを前面に出したほうがいい。

委員

本当は1年から9年までこれに類似した指導案が並べられればいいが、無理なのでⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期で抜粋するという話で、その文言や説明があるといい。各期で9年間を通して自分の体の健康に気づかせるような指導を行っていくことで体力向上、健康増進を図っていくという小中一貫校のねらいを、体力向上部会の提言のようにすればいい。

委員

1、2はこれでいい。3、4になると、これプラス保健の内容の自分の体の清潔とか、二次性徴が入ってくるので男女の協力などが入る。そして5、6になるとけが、病気、心というチェック項目が入ってきて、9年生になった時に、それらを客観的にみてどうだったのかと振り返りをする。9年生などは1年のうち1週間なり、あるいは1学期に1回なり期間を設けて、チェックシートにA・B・Cでランクをつけて感想を書き、それを基に相談室に行く。一貫校で売りにするとしたら、健康な生活のところできめ細かい指導をすること。1、2年生はもう十分なので、4までいった時、7までいった時はどうなのか。それから8、9は総合的な形にもっていけば一貫性が出てくる。そしてそれを養護教諭やカウンセラーがチェックすれば、きめ細かい健康的な生活の部分でいきてくる。それをファイルしていく流れもできるだろう。

委員

本来は学級活動で根付かせるチェックシートのようなものを、小中一貫でカリキュラム的に位置づけられれば、理想的だ。

委員

保健学習は知識として学ぶけれども、さらにそれをどうやって日常生活として意識づけるか、こういう目玉でやっているというところが売りになる。

委員

今回は例として1年、5年、中2を載せているが、本来小中一貫校では毎学年、健康調査をやっているとの位置づけになれば。

アドバイザー

今の指摘は大事。いま先生方が作っている資料がある程度出た段階で、足りないのがあれば、作らなければいけない。

事務局

区内の体育部もいろいろ活動しているし、養護教諭部会もあるので、事務局のほうで今あるものからいくつか拾って次回お示ししたい。

委員

ではⅡ期目は5年生に絞った。けがをしない「危険予測」を身につけてほしいというねらいで、学活を足したプラス6時間の学習内容になっている。ねらいのちょうど真ん中辺り、2の内容【第5学年及び第6学年】のところである。「学級を単位として信頼し、……。」これを前提として考えたのが下のところになる。「けがの防止」の学習を振り返り、気をつけてほしい事柄をポスターに表す。けがや事故が起きやすい場所に安全ポスターを掲示する。

④本事例と体力向上との関連。本事例は体育科保健領域「けがの防止」の発展として取り扱う。内容としては、校内でけがや事故が起きそうな場所を調査し、健康で安全な学校生活を送れるように、ポスターによる啓発活動を行う。保健の1、2時間目辺りで学校のけがが起きそ

うな場所を探す活動をしていて、それを前提に6時間目の啓発活動にいかしていくイメージだ。

⑤はⅡ期の児童に啓発活動を行わせることにより、Ⅰ期の児童はもとよりⅢ期の生徒に効果期待される。また「けがの防止」でのインタビュー活動で、教職員だけでなく上級生とも交流することで、より身近な存在になって人間関係も深まっていく。本事例の概要は、「けがの防止」の学習を振り返り、ポスター作りをする。ポスターのポイントを以下のような形で示し、グループに分かれてポスター作りを行う。結果を発表し、振り返りをしていく。

委員

ペアの学年で、例えば5年が8年にインタビューに行く、あるいは交流学習をさせてもいい。時間の問題があるが、インタビューなどは8、9年生にも行け、そうすると全然感覚が違ってくる。一貫のいいところは、やはりそういうところ。

委員

教員が知らない視点を知っている。上手に教えることにより、自分たちも学習しているから気をつけなくちゃいけない、見られているという意識づけが少しでもできる。

委員

そういう交流学習をさせると、きつともっと充実してくる。この前発見したのだが、小学校の階段の1段の高さと中学校の高さは違う。子どもにはそういう気づきがきつとある。

事務局

5、6年生が中の校舎に来るので、そんな一歩がやはりけがのもとになる。このインタビューの部分は1、2時間目辺りに設定されることが書いてあると、よりつながってくる。

委員

学習の振り返りで「インタビューをしたお礼にポスターを見せにこよう」とする。

アドバイザー

この時間のメインは、インタビューしてきた情報を交換して共有するところで、ポスターを作ることはない。そこまでいくとちょっとぼけてしまうというのが一つ。あとそのインタビューの内容は、校内の安全マップか。校舎の、校内の、地域の？

事務局

校内でいいのではないかな。中学校でも地域の安全マップ作りができるので、そこにも応用が効く形で、まず校内に絞ってみる。

委員

校内のほうがいい。1年から9年までが同じ校舎の中で暮らす形になった時に、1年は絶対、9年に目がいかない。5年もそういうところが、結構あるのではないかな。

アドバイザー

時間数は「けがの手当て」を入れて5時間でいいのか。

委員

まず今までの情報収集の結果をみんなで話し合い、こんなポスターを作ろうと話し合う時間がここ。ポスター作りはその次にくるのではないか。

アドバイザー

そこまで計画の中に位置づけておくかどうか。あと、保健の時間そのものが「けがの防止」は大体5時間でやっているのか。5、6年生で、あの時間である内容は無理だ。

委員

「けがの防止」も交通事故から校内のけが、全部入ってくる。調べ活動などさせたら無理だ。

アドバイザー

気になるのは、ポスター作りがこの授業のメインになっている。この導入の「けがの防止」の学習を振り返るのは、保健学習の内容を振り返ることで、大事なのは上級生にインタビューしてきたことをどこで発表し、情報交換するかで、それがこの中にはない。この時間で大事なのはそこだ。ポスターでなくても安全マップでもいい。クラスで1枚、校内のマップを作ってどこか入り口に掲示してもいいし、上級生でなく低学年に持って行っていい。大事なのは上級生に校内のどんなところが危ないのか、どんなけがが起こっているのかを聞いてきて、こうだったよと確認し合うこと。位置づけとしてはまとめのところで、このほうがいいのかもしい。イメージは、地元の商店街などにインタビューに行って、ポスターセッションのような形で発表会をやる、ああいうことが大事だ。そうしないと多くの子どもたちが上級生と絡まない。

委員

学習の振り返りと、インタビューの整合性を確かめる。あったことを羅列してまとめるだけでもいい。学習したこと、調べてきたこと、確かめたことをまとめる形で、ポスターや掲示物、レポートなどと書いておく。あとは担任裁量でできるようにしておけばいいのではないか。

アドバイザー

やはり5、6年になると行動範囲が広がるので、校内だけでなく地域の情報も上級生から聞いておくことは、事故だけでなく事件、犯罪に巻き込まれないことにもつながっていく。学級活動の内容に書かれているように、心身共に健康で安全な生活態度の形成に寄与することがねらい。必ずしも「けがの防止」に限定することはない。

事務局

保健の学習を学級活動でさらに定着させる、強化する取り組みはとても大事である。

委員

前回からの変更点について。

各活動例のところに先ほどの三つの観点を入れるという話だったが、最初に特別活動における異学年交流活動の、活動のねらいを二つ、共通で出した。上のほうの異年齢集団は児童会活動に大きく関係していて、下の体育的な運動遊びに親しむところは、健康安全・体育的な行事と関連のあるねらいになっている。一つ目は3年と7年による交流活動例ということで、「子とろ子とろ」を挙げている。やる意義は、いろいろな学年とかかわることによってねらいを達成しようとするもの。3年は活発に活動する時期で、遊びを通して素早く動きの方向を変えたり、鬼に対応して素早く動くことができる動きを身につけ、体力を養う。また、みんなでつながって鬼から逃げる動きをすることから、協力・公正の態度も育てていきたいということで書いた。7年は、鬼の動きをみんなに知らせ、子が離れないように配慮したり、鬼になった時は素早く動きを変えたり変化をもたせ、より楽しい運動遊びにする。活動時間、場所、活動内容はこの間と同じ。あと事前事後の指導、発展を書いた。事前の指導はルールを理解させておくこと、あと3年とのグループ分けのこと、ハンデをつけるなどを考えた。事後の指導は、7年のリーダーによる活動の振り返りをみんなですることが大事かと思った。発展では、子の人数を変えたり、親の後ろに並ぶ子の順番を工夫する。

次は全校縦割り班での交流活動例の「フープおくり」でねらいを付け加えた。小1から中3までの異学年が全員で力を合わせて活動することで、連帯感を高めたり、互いに協力し合って親近感を深めたりして、よりよい人間関係を作る。どの児童も、手を離さずにフープを移動させる。小学校低学年の子のほうが容易に動かし、高学年になるにつれてフープがうまく送れないというおもしろさもある。協力して素早く送ることでチームの結束力を高める。事前の指導では、1・3・5・7・9年生と、2・4・6・8年生がそれぞれ同じグループになるように縦割り班を作る。みんなで輪になってエールをかけるなどして、チームの結束力を高める。一番上の学年の人がスタートで輪をかけ、アドバイスをしていく。事後の指導は同じ感じで、発展は、並ぶ順番をチームで工夫する。フープの代わりにボールを使って、上や下から送ったり、仰向けに寝て足で送ったりするゲームもできる。

三つ目は「長なわ大会をしよう」に向けて、のような「中学生が小学生に教えながら交流する例」。ねらいは、寒い冬に進んで体を動かす子を育成するために長なわ大会の計画をする。長なわは持久力を高め、みんなで取り組める運動なので、教え合いや励まし合いがしやすい。さらに「大会に向けて練習しよう」という目あてを持たせることによっていっそう意欲を高め、練習を通してチームとしての結束力も強くなる。小学生の時期に苦手意識を持たせずに、たくさん経験させたい。小学生は中学生のお手本を見たり、教わったりすることで意欲を持たせ、楽しさを感じさせたい。また中学生はチームの記録を高めるために小学生にコツを教えたり、なわの回し方や跳ぶ順番を工夫する。これらの活動を通してより小学生を理解し、思いやりの気持ちを育てることができると考える。

これは前回提案していないところで、1・2年生と7年生による「八の字跳び大会」、3・4年生と8年生による「連続八の字跳び大会」、5・6年生と9年生による「ダブルダッチ大会」を計画したらどうか。事前の活動は、5・6年の体育委員会と7・8・9年生の代表が実行委員会として集まり、長なわ大会の計画を立てる。7・8・9年生が休み時間に練習を計画し、それぞれ自分のチームを集めて、コツを教えながら一緒に練習する。なわ回しはチーム内の7・

8・9年生が担当し、回し方も考えさせる。事後の活動は、実行委員会で振り返りをし、次にいかす。休み時間に継続して長なわ遊びにとりくんでいけるようにする。発展としては、短なわとびを教え合う。冬でなければ、バンブーダンスをやってもおもしろい。

この中で指導案にしなければいけない事例はない。絵は欲しい。

委員

ネックとして、これが本当にできるかどうか。特に「〇〇大会をしよう」と実行委員を募って、それを8、9年生が動かしていくのは、朝の何分かしか時間がとれない中学校の実情を考えると難しい。時程は朝の始業や授業時間も違い、休み時間も全部ずれる。

アドバイザー

もしそうならば、やはりどちらかが特別時程でやる必要がある。どこかで触れておいたほうがいいと思うが、例えば全校できっちり時間を決めてやるのではなく、中学生は有志にする、あるいは委員会単位でレクリエーション的なものに取り組む、それぐらい柔軟な発想があってもいい。この三つの事例の後に出たような、例えば朝の体育集会であれば特別時程を考えると、考えられる発展や配慮をいくつか出しておいてもらえると、その例を参考にしながら「こんなことできるね」と。ただこれをいかに実行に移すかが大変である。

事務局

そこは校長先生の腕にかかっている。

委員

時間をそろえる以外で、中学校の全員参加はそんなにネックなのか。

委員

現実問題として全校朝会も毎週やっていない。月に1回か2回である。

アドバイザー

23区の中学校で区の連合体育大会、夏の選手権などをやっている時、部活に入っていない生徒を早く帰している時がある。そういう時に、大会に参加しない子どもたちが小学生との交流にかかわる、そういう発想をしなければ駄目だ。

委員

部活動の参加の募集についてのプリントを持ってきた。既に今、6年生は6時まで、中学生と一緒に部活をやっている。4枚目は部活の検討事項。兼部は無理。桜中は、生徒の数が全校で150人しかいないので、兼部を可能にした。そうしないと試合に出られない。7年から9年までが小学校のクラブ活動に参加する流れは、原則として実現できる方向だ。その代わりに、木曜日の6時間目をクラブ活動にすると中学は1時間時数が足りなくなる。そこで水曜を特別時程の6時間授業にし、6時間目をうみだす形にした。再登校の扱いは危ないのでなしにした。

一番後ろは外国語活動を3年から入れる。算数の少人数はもう1人増やして4クラスにする。

それから5、6年生から教科担任制を取り入れる。そのような流れで進んでいる。

今のところ、保護者や校内で困っていることは出ていない。ただ、小学校の教員が中学の部活に指導しに行く、そこが踏み切れないでいる。どういうふうに参加していいかまだ全然話し合われていないので、その辺がネックだ。

アドバイザー

中学校の部活動の顧問会や運営委員会に小学校の先生が参画して、立ち上げていくしかない。

委員

もう1枚は運動の事例で、マット運動の下位の動き、構成するマット運動の動きで、昔使ったものだ。次回、8月30日に提案するのは、棒人形で描いてこようと思うが、このような動きをいくつかの流れにまとめる形でいいか。

事務局

それでは今日検討できていないのは「薬物乱用」で、これは置いておく。

最後に事務連絡が2点、1点目は次回の確認。8月30日、12階の教育委員会室。それから2点目、事前の準備があればお声がけをお願いしたい。